



撮影 宗景 正
芦川常恵さん

四季によせて

【春】私、芦川常恵は、1941年に中国北京で生まれました。父の芦川駿逸は1874年和歌山に生まれ、成人し04年中国に渡り、革命運動にも参加していたそうです。晩年は満州国の建立にも携わり、清朝王公一族の財産整理委員会の顧問を務めていましたが、43年私が2歳の頃に病で亡くなりました。母は中国人で、富貴と云い、現地で知り合い再婚したそうです。私には兄がおり、生まれも育ちも中国の私たちですが、父が亡くなった事で、それまで

の生活が180度ひっくり返りました。父が私たち兄妹の為に残してくれた貯えも戦争の只中の事もあり、敗戦の頃には底をつき、母は兄と2人で家で近所の洗濯などを引き受けて私たちを育ててくれました。私は毎朝、市場に500gの玉蜀黍粉を買って行き、それを蒸して食べるのが家族の食事の全てでした。私が16歳の時に母も他界し、兄妹2人きりになりましたが、兄は母の手伝いをしていたので仕事を続け、私は母の姉に引き取られて生活することになりました。伯母には子供がなく、優しい人

で随分と可愛がっていたので随分と可愛がっていた。【夏】小学校を終え、中学に入った頃の私は文章力がなく、作文は大の苦手で、宿題などは殆ど兄に頼っていました。絵の宿題等も同様で、これからどうなるのという状況でしたが、スポーツは得意で、北京の中学校の体操競技試合では全体の6位を取る事ができました。今も大切な思い出として心に残っています。そして奨学金制度のおかげで中学から大学院【北京大学医学部薬学院】まで、難なく過ごすことができました。大學生の時の私に大きな影響を与えた趣味が生まれました。当時、香港からの同窓生の女子が私の競技姿を撮ってくれて、カメラにとっても興味を持ちました。その時の写真の出来映えは満足に映っているものは2枚程しかなく、不満が残りましたが、私は将来カメラを買

える時がきたら自分でも色々な景色や人物を撮ってみたいと切望しました。大学を卒業し製薬会社に入社、製剤現場で技術責任者として働き、友人に紹介された男性と結婚。主人46歳、私32歳でした。暖かい人で中国科



北京で住んでいた頃の芦川さんの作品

学院心理学の教授でした。何年か後、主人が出張中に体を壊し、杭州病院に入院した時は慌てて病院に駆けつけました。退院して2人で舟山諸島の聖地という普陀山へハイキングに行く事になりましたが、念願のカメラを買いましたが、慣れないフィルムが入れ方が悪かったのか、その時の写真は全滅でとてもガッカリしました。それ以来主人は懲りたのか、撮影は私の専門になり、小さいカメラでしたが、撮影にも慣れ、のめり込みました。90年代初め、私が豪州に1ヶ月程出張する事になり、兄がミノルタのカメラを譲ってくれ、その後、一眼レフやビデオカメラもくれましたが、説明書が日本語の為、使い方がよく判らず友人に聞いてもダメで、一念発起し一語一語辞書を引

にまだ見たことのない私の母国へ帰りたいと願うようになり、それより何年か前にも日本へ帰ろうかと主人と相談しましたが、時期を見ようと言われ諦めた事がありました。実は主人は私と結婚する前、文化大革命の最中に元の奥さんと自殺を図りましたが、主人は助かり、そんな過去の事もあり私は同情心を持って主人の意思を尊重し、帰国の事を棚上げにしていました。【冬】2008年67歳の時やと帰国する事ができました。93年3月頃に既に帰国していた兄の家に娘と2人で3ヶ月程の予定で訪日しましたが、主人が入院との知らせで急遽中国へ帰りました。でも主人は介護の甲斐もなく5ヶ月程で亡くなり、とても辛い日々を過ごしました。その後08年に帰国する決

交流の広場

緑の森をハイキング

7月18日、植物観察、写真撮影の講習を兼ねて14名が参加して西谷の森公園へ行きました。雨模様でしたが植物に詳しい工藤康弘講師より、普段何気なく見過ごしている花や草木などの名前や特徴を教えていただきました。特に韓さんは植物の知識も豊富で工藤さんとのやり取りが弾んでいました。芦川さんは立派なカメラ持参で写真家の大野純生講師の手ほどきを受け、池や雨に濡れた木立などを盛んに写していました。他の方もおしゃべりとランチを楽しみ、心も体もリフレッシュした一日でした。

(山本育子)



撮影 芦川常恵さん

つぎで縫っていきます。針仕事をやる機会が減りましたが、とても楽しそうでした。最後に飾りボタンを付けて出来上がり。」



出来上がった作品

何を入れようかな (小物入れ作り教室) 10月19日、梅プラザに十一名が集まり、かわい

(山本育子)

の入れ物に何を入れましょうか。そんなことを考えるのも手作りの楽しみのようで、皆さん笑顔で小物入れを手にとっていました。

(中田いずみ)

「尼崎平和のための戦争展」に参加

梅プラザまつりに参加 10月26日(土)と27日(日)、新しい施設になった尼崎市立中央北生涯学習プラザにおいて第1回「梅プラザまつり」が行われた。コスモスの会も日ごろの学習の成果を展示部門で発表した。学習した文型を使っての例文、夏の思い出や自己紹介を綴った作文、また絵画や小物入

れといった文化教室の作品をパネルいっぱい展示した。学習者の一生懸命さが伺える作品に来場者はじっと見入っていた。

08年4月から新しい支援策が開始された。しかし、私たちの事情を理解した支援策なのか問い直したい。例えばこの支援策には収入認定があり、私たち夫婦が頑張っている掛割が支給給付金から減

額される。生活保護とどこが違うのか、訴訟の意味がどこにあったのかと思う。さらに帰国を認められるのが遅かったため、日本語のできない2世代が大勢いるのに支援がありません」と話され、最後に「暑い中、私の話を聞きに来てくれてありがとうとこころいませました。戦争に反対の心は一つ、お互いを地域社会で認め合える実感しました。

(藤田順子)



重光さんの体験を聞く参加者

「コスモスの会の参加は5回目、今年は昨年が続いて「中国残留日本人の人生から戦争と平和を考える」のテーマで、中国残留

中国「残留孤児」重光孝昭さんが体験談 恒例の語り部コーナーでは、前半原爆被害者の会の紙芝居と語りがあり、後半は今年初めてコスモスの会が担当し、日本語教室の学習者、重光孝昭さんに体験を話していただきました。重光さんは「中国残留孤児が帰国して日本で仕事を探すのは難しく、生活も苦しかった。それに対して日本政府は冷たいと思っていた。

2004年、兵庫県でも中国残留孤児が

心をし、日本に帰る事が出来ました。西宮浜の住宅に落ち着いて考えた事は、先ずマナー・ルール・習慣等、覚えるべき事が沢山あり、日本社会で生きる為に日本語の勉強は必須だと痛感しました。ご近所の皆さんの話している言葉が理解出来ず打ち解けるのに随分時間がかかりました。よく中国人と誤解され、帰国して1ヶ月程で大阪西九条の日本語交流サロンに参加し、その後YWCAの日本語教室にも参加し、毎日14時間勉強しました。そして18年コスモスの会に参加して健康の会で沢山の友達も出来、今は毎日朝を迎えるのが楽しみです。一方まだまだ流暢な日本語は喋れませんが、人生にサヨナラする日まで頑張ってください。皆さんのかかわりを大切に、楽しい時を過ごしていきたいと思っています。



(聞き手 雲北伸子)

主な行事

- 7月 日本語ボランティア研修会 (3回目)
- ハイキング
- 8月 平和のための戦争展に参加
- 盆踊りに参加 野菜の店を出店
- 9月 ハザーに出店
- 和食料理教室
- 10月 小物入れ作り教室
- 梅プラザまつりに参加
- 11月 竹細工教室 餃子作りのへう製作
- 交流バスツアー
- 第5回中国残留日本人への理解を深める集い